

ルネッサンス期イタリアの傭兵隊長

その実像

林 要 一

I.

イタリアで最初のイタリア人だけを構成員として組織された傭兵部隊は1377年にアルベリコ・ダ・バルビアーノ⁽¹⁾が創設した「サン・ジョルジョ軍団」⁽²⁾である。

設立の直接の動機は、同年2月、当時著名なイギリス人傭兵隊長ジョン・ホークウッド⁽³⁾率いる外国人傭兵隊が引き起こした「チェゼーナの大虐殺」⁽⁴⁾にあったとされている。その傭兵隊の一員としてこの事件にかかわったアルベリコは、自分とおなじロマーニャ人の市民を冷酷に大量虐殺する無頼の外国人兵士に深い怒りと悔恨を覚え、その反省がキリスト教と言語を共有するイタリア人だけの部隊創設に踏み切らせた、というのである。

いずれにせよ「サン・ジョルジョ軍団」の設立とその後のアルベリコの活躍がひとつの契機となって、イタリア各国政府のなかにイタリア人傭兵隊に対する信頼が高まり、隊長も兵士もイタリア人を優先的に雇用する風潮が広まって、15世紀前半から世紀末にかけてのイタリア人傭兵隊長の黄金時代を迎えることになる。

1440年代の前半、ヴェネツィアと契約した傭兵隊長ミケレット・アッテンドロ⁽⁵⁾が率いる部隊構成員の出身地をみると、教皇領内諸国36%、トスカーナおよび北イタリア31.5%、ナポリ王国26.8%、フランス、ドイツ、ハンガリー、カタローニヤ、アルバニアなど5.7%で、全体の94.3%がイタリア人である。

⁽⁶⁾

また、1482年4月、ウルビーノ公フェデリコ・ダ・モンテフェルトロが最後の務めになるフェッラーラ戦争への出陣に際して率いた軍団の内訳をみると、少・中隊長級合計260名の出身地は、アルバニア人3名を除きすべてイタリア

人で、しかもその 4 割強がウルビーノ領内の住人になっている。(7)

それ以前の傭兵隊は、主として外国人の兵士くずれを中核とする集団で、隊長も外国人騎士であった。こうした傭兵隊は都市国家に戦争の道具として雇用されている間は一個の軍隊として行動するが、そうした働き口がなくなれば、生活の糧を得る必要上、思い思いに強盗、略奪を働かざるを得ず、その対象にされる一般庶民にとっては恐怖の的であった。

外国人兵士の多くは、13 世紀末から 14 世紀の初めにかけて、アルプスの彼方から皇帝や王たちに率いられてイタリアに入り、主人が本国へ引き揚げた後もそのまま残留した者達だが、イタリアは傭兵として雇用される機会が多く土地も豊かで略奪も容易であるとの噂を聞いて、目的意識をもってやって来る者もいた。

事実、その頃のイタリアはミラノ公国、ヴェネツィア共和国、フィレンツェ共和国、ナポリ王国および教皇国の 5 大領域国家が割拠していたほか、それらの周辺に或いはそれら諸国間のいわば緩衝地帯として、フェッラーラ公国、マントヴァ侯国、サヴォイア公国、ジェノヴァ共和国、シエナ共和国、などの中小国家が散在していた。

このうちミラノ、ヴェネツィア、フィレンツェおよびナポリの 4 大国は、互いに勢力圏の拡大を意図し折りある毎に戦火をまじえていた。とりわけナポリについては王位継承をめぐるアラゴン家とアンジュー家の角逐が断続的に発生し、ミラノ内部においては政権の独占を狙って骨肉の争いや下克上の戦いが頻発していた。また、教皇のアヴィニョン幽囚とその後の教会大分裂という異常事態にあった教皇国では、一種の無法状態に陥った領内に教皇や皇帝の代官を呼称する諸豪族が割拠して互いに対立抗争を続けていたし、他方、教皇庁自体も折に触れて直接支配体制を回復すべく教会の権威を軽視する諸豪族に対して武力行使を辞さなかった。中小国家は中小国家でこうした大国の抗争に巻き込まれるなかで、いかにして自国の安全を守るかに汲々としていた。

それでいながら各国はそれぞれの政治経済的目的を達成するに十分な軍事力を常備しているわけではなかった。むしろ、その都度その都度利益を同じくする国々と合従連衡することによって集団防衛力の強化を図るかたわら、それを背景として外交による紛争解決に当たる、それで打開のめどがたたない場合には、短期間金の力で傭兵隊を雇いその武力に訴えるやり方のほうが、はるかに賢明であり、合理的かつ経済的でもある、という考え方がこの時代の各国支配

者、とりわけ都市国家を支配する商人階層の共通理念であったと考えられる。また、そのような思考を可能ならしめた背景として、当時のイタリアが産業、貿易、金融の各部門において他のヨーロッパ諸国を遥かに凌駕する経済力を持っていたことがあげられる。

しかし、現実の問題としては、外交による解決が見つからないから傭兵隊を雇用する、のではなく、まず傭兵隊を雇って防備なり攻撃なりの準備をし、それと並行して外交交渉をおこなうほうが実際的であり、より効果的である。因みに、戦争が不可避の状態になってから有能な傭兵隊長を確保しようとしても、そのような隊長はすでに他国に雇用されている場合が多かった。それ故、傭兵隊の需要はこの時代非常に高かったのである。もちろん、フィレンツェのように、過去の経験の遺産として、また、平時に傭兵に投資することを拒否する商人階層の経済合理主義もあって、15世紀を通じて傭兵隊長というものに根強い反感と不信感を抱いていた国もあるが、それ故に大国のなかでは軍事的に最も弱い国と見なされていた。(8)

II.

1379年、アルベリコは教皇ウルバーノ6世の命を受けて、対立教皇クレメンス7世のブルトン人傭兵隊をローマ近郊で撃破、対立教皇をアヴィニオンに逃亡させるきっかけを作った。翌80年には、自分の師匠であったジョン・ホークウッドの軍をトスカーナ、ウンブリアでうち破って、イタリア人傭兵隊の強さを内外に示した。その強さの秘密は、重装騎兵と効率的な軍隊組織と、もちろん彼自身の巧みな用兵術とにあった。そのためアルベリコの幕下からは、ヤコポ・ダル・ヴェルメ⁽⁹⁾、ファチーノ・カーネ⁽¹⁰⁾、ブラッチョ・ダ・モンターネ⁽¹¹⁾、ムーツィオ・アッテンドロ⁽¹²⁾など次代を背負って立つ優れた傭兵隊長が輩出された。なかでもブラッチョ・ダ・モンターネとムーツィオ・アッテンドロは双璧で、それぞれに就いて戦術を学んだ者はブラッチョ派とスフォルツァ派とよばれ傭兵隊長の世界では一目おかれる存在となった。

14、15世紀に活躍したイタリア人傭兵隊長のなかには、その事蹟に関する記録よりモルネッサンスの巨匠の手になる絵画や彫刻を通じてその名を知られているものが少なくない。傭兵隊長自身が自ら手に入れた栄光を家中や子々孫々に伝えるために注文制作させ私蔵していた肖像画や彫刻はさておき、現在公共

の場でみることができるものには次のような作品がある。

シエナの市政庁宮殿「世界地図の広間」の壁に描かれたシモーネ・マルティエーニのフレスコ画は、シエナ共和国防衛に尽くした傭兵隊長グイド・リッチョ・ダ・フォルアーノ⁽¹³⁾を永遠に讃えるため同共和国がマルティエーニに依頼したものだ。

フィレンツェのサンタ・マリア・デル・フィオーレ聖堂にあるアンドレア・デル・カスターニョ作の騎馬像図とパオロ・ウッチェッロがコジモ・デ・メディチの注文で描いた「サン・ロマーノの戦い」の主人公は、シエナ軍と戦うフィレンツェの傭兵隊長ニコロ・ダ・トレンティーノである。⁽¹⁴⁾また、カスターニョの騎馬像図の前壁にはウッチェッロの筆になるジョン・ホークウッドの騎馬像図もある。

マッキャヴェッリの辛辣な傭兵隊長批判論を待つまでもなく前述の通り傭兵隊長に一種の反感と不信感を抱いていたフィレンツェが、町を象徴する大聖堂内にこのような形でその傭兵隊長を不滅なものにしたとは、どう見ても自己矛盾と云わざるを得ないが、反面、この二人の傭兵隊長にはそうせずにはいられないだけの精神的負債をフィレンツェが負っていたことを物語るものであろう。

ブロンズの騎馬像でその勇姿を偲ばせる武人もいる。ヴェネツィアのサンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ広場にあるヴェッロッキオ作のブロンズ騎馬像は、同共和国軍の総司令官を務めた傭兵隊長バルトロメオ・コッレオーネ。⁽¹⁵⁾この武将は死に臨んで総額 30 万ドゥカーティに上る動産、不動産を、自分の記念像を建立することを条件にヴェネツィア市に遺贈した。ヴェネツィアは如何なる尽忠の士であっても個人崇拜の神話をつくらないため記念像は決して建立しないことを原則としていたが、かかる異例の事態にあっては例外を認めざるを得なかった。傭兵隊長の収入とそのメセナティズムについては後述するが、コッレオーネのこの一事からみても有名な傭兵隊長ともなればその財産は莫大なものに上ったことが分かる。パドヴァのサンタントニオ聖堂の前にあるドナテッロ作のブロンズ騎馬像はこれもヴェネツィア軍総司令官を務めたことのある、通称ガッタメラータのエラスモ・ダ・ナルニ⁽¹⁶⁾だが、この像も、ヴェネツィア元老院の特別の許可を得て、未亡人と息子が私費で建立したものである。

傭兵隊長として名をなした者の多くは、貴族階級の出身か、ウルビーノ、マントヴァ、リミニ、フェッラーラといった中小都市の領主で、農民や職人など地位も財産もない境遇から身を起こして出世した者は案外少ない。前出のガッ

タメラータ、カルマニョーラ⁽¹⁷⁾、ニッコロ・ピッチニーノ⁽¹⁸⁾などがそれに相当する。ルネサンス期の著名な傭兵隊長 160 人についてその出自を調べた研究があり、それによると、そのうちの 100 人、つまり約 60% がコロンナ、オルシーニ、スフォルツァなど僅か 13 家からでている。⁽¹⁹⁾

III.

傭兵隊長と依頼者たる君主あるいは都市国家政庁との関係は一種の役務契約（Condotta）によって規定される。基本条項で、契約の期間、傭兵隊長側が提供する兵力、注文者側が支払う報酬額、報酬の支払方法などを規定するほか、特殊な政治条項を追加する場合もある。傭兵隊長はさらに小規模な傭兵隊と下請け契約を結んで必要な兵力を集めるのが普通である。この下請け契約には捕虜の身代金、戦利品などの分配についても細かな規定が設けられた。

期間は、依頼者側の事情により決められるのが原則であるが、傾向としては 14 世紀の 6 ヶ月から徐々に延長され、15 世紀の後半には 3 年の長期契約も現れる。

傭兵隊長が提供すべき兵力については、騎馬武者と歩兵に区別してそれぞれの兵数を明記する。契約上、騎馬武者の数は「ランチャ」（Lancia 複数で Lance）あるいは「武者」（Uomo d'arme, 複数で Uomini d'arme）で表示された。「ランチャ」も「武者」もともに、基本的には騎馬武者 2 名と従卒 1 名の 3 名、当時の戦争に欠かせない馬の数で云えば騎馬武者の乗る駿馬 2 頭と、従卒が武器、荷物運搬用に用いる駄馬 1 頭からなる兵力単位である。15 世紀も半ば以降になると、それを騎馬武者 4 名と従卒 1 名、計 5 名（＝馬 5 頭）とする契約も現れる。⁽²⁰⁾

しかし、1441 年にヴェネツィア共和国がミケロット・アッテンドロと結んだ契約のランチャ当たり報酬に関する史料によれば、馬 5 頭（騎馬武者 4 名と従卒 1 名）からなるランチャへの報酬は、通常の 1 ランチャ（駿馬 2 頭 + 駄馬 1 頭）+ 2/3 ランチャ（駿馬 2 頭）を積算基礎にして算定されている。従って表面的には 1 ランチャ馬 5 頭の場合であっても、契約上の基礎兵力単位はあくまで 1 ランチャ = 馬 3 頭で、それを上まわる頭数はランチャの端数と理解されていたことを示している。⁽²¹⁾

また、契約は提供兵力と報酬を戦時と平時に分けて明記するのが通例である。

平時の報酬額は、その時々国際情勢によって準備しておく兵力も違ってくるから一概には言えないが、おおむね戦時の半分が目安である。平時にも傭兵隊を確保しておくのは、情勢が極めて流動的ななかで、その傭兵隊長が非常に有能であるため他国には絶対渡したくないからであり、同時に、その経験と知識を自国の防衛体制の強化に利用するためでもあった。ウルビーノ公フェデリコ・ダ・モンテフェルトロは、建築家フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニに命じて自領内の各地にいろいろな形式の城壁、城塞を築かせている。その目的は、第一義的には自国防衛体制の強化だが、同時に、これらをウルビーノ駐在の各国大使の目に触れさせることによって外国から発注を促すための見本展示の意味合いをも兼ねていたのである。⁽²²⁾

依頼者の報酬の支払いは、前払い金と月毎の支払の二本立てで、前払い金は通常は全額の3分の1、契約期間が6ヶ月の場合はその半額であった。傭兵隊側は武器甲冑、馬、輜重などを自前で用意しなければならないから、そのための支度金の意味もあったと考えられる。

参考までに傭兵契約の一例を挙げよう。⁽²³⁾

以下は、1467年5月にナポリ王、ミラノ公、フィレンツェ共和国および教皇の四者が共同でウルビーノ公フェデリコ・ダ・モンテフェルトロと結んだ契約の概要である。

契約期間： 1467年6月1日から1年間

報酬： 平時 36,000 ドゥカーティ

戦時 60,000 ドゥカーティ

ただし、実際には6月から亡命フィレンツェ人が率いる傭兵部隊のフィレンツェ侵攻を阻止する戦争が始まったので戦時報酬が適用された。またフェデリコは四カ国連合軍の総司令官をも務めたからこれに対する個人報酬もあった。

提供兵力： 「武者＝ランチャ」150

この契約でウルビーノ公に求められた役割は、四カ国連合軍を総司令官として指揮することでもあったから、この兵力は公の親衛隊の意味をもつものと考えられる。

依頼者の経費分担：

51,660 ドゥカーティをナポリ王、ミラノ公、フィレンツェの

三者で等分に負担し、残りの 8,340 ドゥカーティを教皇が負担する。

支払方法： 報酬総額の 3 分の 1 を前払い金として契約時に支払い、残額は 8 月から月払い。

このように傭兵隊長が依頼者から受け取った報酬のうち隊長個人の収入となるのはどの程度だったのか、という疑問は非常に興味深い。この点についてウルビーノ大学 W・トンマゾーリ教授はその著書「フェデリコ・ダ・モンテフェルトロの生涯 1422-1482」のなかで次のように述べている。⁽²⁴⁾

1478 年 6 月、フィレンツェとの戦争を目前にして教皇シクストゥス 4 世とナポリ王はフェデリコとの契約を更新した。「騎士」400、歩兵 400 に対する報酬年額 77,000 ドゥカーティで、一年契約であった。当時ウルビーノに常駐していたマントヴァ侯の大使マッテオ・ダ・ヴォルテッラは本国への報告のなかで、フェデリコが騎士たちに前渡し金として一人 15 ドゥカーティ、プラス衣服費 8 ドゥカーティを手交したと書いている。

これらの数字をもとにフェデリコの支出を計算してみると次のようになる。まず、前渡し金は通常報酬総額の三分の一だから、騎士一人当たりの報酬年額は、 $23(15+8) \times 3$ でほぼ 70 ドゥカーティとなる。騎士の人数は 400 人であるから、騎士全員の報酬年額は、 70×400 で、28,000 ドゥカーティとなる。歩兵の給料は通常騎士の三分の一である。従って、歩兵全員の報酬年額は、丸めた数字で 10,000 ドゥカーティ。これらを合計したフェデリコの総支出は、38,000 ドゥカーティとなるから、契約によって受け取る報酬総額 77,000 ドゥカーティとの差額 39,000 ドゥカーティがフェデリコの収入になる計算である。つまり、傭兵隊長の取り分は契約上の報酬の半分以上ということになる。

IV.

こうした報酬が当時の人々にとって一体どれだけの価値があったのかを理解するには、15 世紀におけるドゥカート貨を現代の貨幣価値、とりわけ日本円に換算すると幾らになるか知る必要がある。とにかく莫大な金額であったらうということは、スフォルツァ、ゴンザーガ、エステ、モンテフェルトロ、マラテスティなど君主であって傭兵隊長を務めたものが、そのメセナティズムによっ

てルネッサンス文化史上に残した足跡を一瞥すれば容易に想像できる。しかし、莫大といってもどの程度に莫大なのか。その点について前出のトンマゾーリ教授は前出の叙述の注で、1904年にG・ルツァットが雑誌論文に発表した試算を一考に値するとして関係箇所を引用しているので以下に孫引きする。(25)

「400年代のウルビーノにおける貨幣の価値と我々の時代のそれとの正確な関係を立証することは不可能である。しかし、当時の史料を読むと、その時代においては、小麦価格が1スタジオ(約33キロ)当たり1/4フィオリーノであり、また、1コッピア(1/4ヘクタール)の土地価格が15から20フィオリーノの間を上下していたから、1フィオリーノないし1ドゥカートは、現在(1904年)の貨幣価値にすると概ね30リラに相当するはずだと、ある程度の確率をもって云うことができる」

トンマゾーリ教授は、さらにその注のなかで、このルツァットの算定方式を用いれば、計算上の誤差はあるべきも、1フィオリーノないし1ドゥカートの価値は現在のリラ貨で7万?8万リラに相当するとしている。ここで云う「現在」は、同教授の著書の出版年が1978年なので、1970年代中頃のことと解される。

それでは1ドゥカートは日本円では幾らになるのだが、単純に1970年代のリラ・ドル平均相場と円・ドル平均相場から円・リラの関係を計算してみると、当時のドル相場はリラで800リラ、円で300円だったから、1円は約2.67リラになる。これを上記の7万~8万リラに適用すると1ドゥカートは2万6千円~3万円の計算になる。ただこれは1970年代の換算値だから21世紀初頭の円貨となると、この間の日本における物価指数の変動を考慮しなければならないが、総務庁の総合物価指数の推移をみると、この間に日本の物価は倍増している。そこで単純計算すれば現時点での1ドゥカート相当円貨は5万2千円から6万円になるから、目安としては6万円とするのが適当であろう。

しかし、ここで問題になるのは、イタリアの試算方式が土地価格を基礎にしている点である。土地価格については日伊間の懸隔が非常に大きい上に、価格高騰率についても日本は到底イタリアの比ではない。そうした現実を考慮すると実質的なドゥカート相当円貨は6万円より相当高くなるのではないだろうか。ただこの疑問を明確に解いてくれるデータはない。

以下は 15 世紀における各種の報酬の具体例であるが、これに上記の換算率を適用して円貨を計算した場合、はたして現代日本人の金銭感覚からみて妥当な金額であるかどうか、これは読者の判断にお任せしたい。

先に述べた通り 1467 年にウルビーノ公が結んだ役務契約では、騎士一人の報酬年額は 70 ドゥカーティ、歩兵はその三分の一であった。円貨に換算すると 420 万円と 140 万円、月額では 35 万円と 11 万 7 千円になる。そしてウルビーノ公自身の年収は、3 万 9 千ドゥカーティ、すなわち 23 億 4 千万円であった。

1470 年代中頃のウルビーノ公の年収について、トンマゾーリ教授は、役務契約報酬、税収、それに粉挽き場、フェルミニャーノ製紙工場、家畜類など私有財産からの収益を加えると、15 万～20 万ドゥカーティに上ったものと推定している。⁽²⁶⁾円換算の年収は、20 万ドゥカーティとして 120 億円となる。

当時フェデリコは、ウルビーノの宮廷に 5 百人の人間を抱え、ウルビーノをはじめ各地で建設土木事業を行うとともにメセナティズム関連にも相当額の出費をしていたが、120 億円ですべての出費を賄うことができたのだろうか。

因みに、1500 年頃のヴェネツィア共和国の歳入は 115 万ドゥカーティ、同額の歳出のうち国債の利子償還が 15 万 5 千ドゥカーティであった。また、1475 年に死んだヴェネツィアの傭兵隊長コッレオーニは 23 万ドゥカーティ余の現金を遺産の一部として残した。この金額は、当時最大の銀行家であったコジモ・デ・メディチの富にも匹敵するものであった。⁽²⁷⁾

V.

傭兵隊長は往々にして不誠実で信義に悖る行動も平気ですると非難されるが、傭兵契約の不履行、特に報酬の支払い遅滞という点では注文者側も同列で、しばしば傭兵隊長側を困難な状況に追い込んでいる。

1453 年 9 月、リミニ領主シジスモンド・パンドルフォ・マラテスティはミラノおよびフィレンツェとの傭兵契約を更新、騎馬 470 ランチェと歩兵 400 を提供して年額 6 万ドゥカーティを得ることになったが、その時点で前年契約の報酬年額の半分以上 3 万 2 千ドゥカーティが未払いであった。⁽²⁸⁾

ウルビーノ領主フェデリコ・ダ・モンテフェルトロは、1447 年 10 月 1 日から 1449 年 1 月 31 日までのフィレンツェとの傭兵契約で総額 119,064 フィオ

リーニを受け取るべきところ、実際の受領額は 58,244 ドゥカーティに過ぎず、半分以上が未払いであった。長い戦争で疲弊したフィレンツェの財政事情は、傭兵隊長への支払義務に約定通り対処することを許さなかったのである。しかし、傭兵隊長としては注文者からの入金がなくとも兵士への報酬を払わないわけにはいかない。せっぱ詰まったフェデリコは、1449 年夏、たまたま領内を通行中のフィレンツェ商人の一隊をその荷物ともども差し押さえ、債権を完済してもらわない限り釈放しないとフィレンツェに通報した。フィレンツェは直ちにジョヴァンノッツォ・ピッティをウルビーノに派遣して交渉を始めた。フィレンツェ側は、フェデリコへの支払保証として差し押さえられた荷物をウルビーノに残す代わりに商人を釈放することを提案。交渉は紆余曲折を辿った後 1450 年に入ってフィレンツェ側が折れ、最終的に 3 月 28 日に残金が支払われて一件落着となった。この時代、フェデリコの強引だが断固とした態度は、正当な権利として受けるべきものを得るための対抗手段として当然視され、傭兵隊長の世界では依頼者の契約違反に対するいわば慣行化された戦術となっていた。⁽²⁹⁾

もちろん穏便な対応策としては、フィレンツェの銀行やヴェネツィアその他富裕な都市から借金する方法があり、フェデリコも多くの場合はその方法をとっているが、この場合は、ウルビーノ領主となって日も浅く、前代領主等の借財の返済やフォッソブローネ購入費⁽³⁰⁾の返済のための借金があり、それ以上の借金をする余裕がなかったのであろう。

傭兵契約において金銭報酬と並んで重要な条項に政治条項がある。その内容は傭兵隊長のおかれた状況によって異なるが、傭兵隊長が元来は領主である場合、つまり、守るべき土地と人間をもっている場合にこの条項を特記することが多い。

具体例としてフェデリコ・ダ・モンテフェルトロが 1482 年結んだ最後の傭兵契約のなかの政治条項をみてみよう。⁽³¹⁾この契約が結ばれた背景には、長年友好関係にあった教皇とナポリ王の間が破綻し、教皇はヴェネツィアと、ナポリ王はミラノ、フィレンツェとそれぞれ同盟して対立する、という政治情勢の変化があった。教皇がナポリ王と決別してヴェネツィアと手を結ぶにいたった理由としては、ナポリ王が教皇の頭越しにロレンツォ・デ・メディチと直接取引をして第三次フィレンツェ戦争を終結させた経緯、ナポリ領オートラントを占領したトルコに対するナポリとヴェネツィアの政策の相違、甥のジロラ

モ・リアーリオが強引に推進する教皇俗権拡張政策を後押しする教皇シクストゥス4世と、トルコとの関係改善をもって背後を固め本土への勢力発展を図らんとするヴェネツィアとの思惑の一致などが考えられる。

教皇とナポリ王双方から個別に熱心な契約継続の誘いがあるなかで、二者択一の苦渋の選択を迫られたフェデリコは、外交手段を尽くしてなんとか両者の歩み寄りを図り、従来通りの両者との契約を維持しようと努力するが徒労に終わる。この間にヴェネツィアは教皇の甥との約定に基づいて着々とフェッラーラ侵攻の準備を整え、もって教皇の俗権拡大政策、つまり教皇の直接統治領の拡大に同調する姿勢を明らかにするに及び、フェデリコは、教皇とヴェネツィアの領土的野心が、勢力均衡の上に成立していたイタリア半島の平和を破壊しかねないことを恐れ、とりわけ教皇の俗権拡張政策の将来に、ウルビーノ公国存続への危険を予感して、ナポリ同盟側に付く決心をするのである。

政治条項の第一は、教皇が本契約への参加を希望する場合同盟諸国とウルビーノ公はこれを歓迎する、というものである。これは、この期におよんでも教皇が翻意してくれる可能性に期待し、そのために門戸を開放しておきたいとのフェデリコの願いに同盟国が譲歩した条項であろう。

すでに60才の老人で健康的にもすぐれなかったフェデリコの最大の心配は、未だ10才の嫡子グイドヴァルドの行く末であり、自分が亡き後のモンテフェルトロ家の行く末であった。同盟諸国が契約期間中(3年)フェデリコとその嫡子と領国を保護・防衛するほか、万一フェデリコが死亡したときは、嫡子とその領国・家臣を同様に保護防衛し、嫡子には年額1万5千フィオーリーニを支給する、との条項は、まさしくフェデリコの懸念を払拭する意味合いをもつもので、これがフェデリコの最終的な意思決定の鍵となったのではなからうか。

他方、ウルビーノ公国の所領は理論的には教皇国に属する領土であるから、教皇の代官としてその地を統治してきたフェデリコが死亡すれば、教皇国から領地返還を要求される可能性も排除できないことは、マラスティ家に対する過去の教皇のやり方をみても容易に想定される。

上記の契約の門戸開放は、かかる可能性を未然に防ぐための予防措置でもあるが、フェデリコはさらに教皇の心を和らげるため、同盟諸国に、教皇シクストゥス4世の甥で、フェデリコの娘婿でもあるセニガッリア伯ジョヴァンニ・デラ・ローヴェレとその所領をあらゆる侵害から守る義務を負わせる条項を挿入したほか、フェデリコ自身はいかなる場合であっても教皇及び教皇国を攻撃

することを命令されないとの条項まで同盟国側に吞ませている。

事実、フェデリコはフェッラーラに侵攻したヴェネツィア軍と戦い、教皇軍との対戦にはナポリ王国軍が当たったが、フェデリコの娘婿ロベルト・マラスティ指揮する教皇軍に大敗する結果となった。余談ながら、フェデリコは、このロベルト・マラスティが、その父シジスモンド・パンドルフォをフェデリコに攻め滅ぼされた恨みから、フェデリコ亡き後、モンテフェルトロ家に復讐するのではないかと危惧していた節がある。その両人が、ともに同じ 1482 年 9 月 10 日、かたやフェッラーラで、かたやローマで戦病死したのはいかなる天の配剤であったのだろうか。お陰でフェデリコの血脈は、デラ・ローヴェレと家名こそ変わったが、1695 年まで綿々と続くことになるのである。

VI.

15 世紀の傭兵隊長のなかには人文主義的教養を備え、ギリシャ・ローマ古典時代の精神の復活再生を目指す学問、芸術を庇護した人が少なくない。その多くは傭兵隊長を職業としながら専制君主として独自の宮廷をいとなむ者であった。この時代は、貴族階級はもちろん地方豪族であっても子弟には男女を問わずラテン語ギリシャ語の素養を身につけさせるのが通例であったから、それらに長じたかれらは、人文主義思潮にふれた際これをなんら抵抗なく教養として摂取し、その道の学者や芸術家とも親しく交流したい欲求も生まれたのである。他方、人文主義者たちも、専制君主が、自分の人格と才能だけを頼りにする点において内面的に同質であることに共感を覚えたが、それ以上に高い俸給が得られることから自由都市より宮廷のほうを明らかに好んだ。⁽³²⁾

傭兵隊長としては、悪逆と背徳の権化のように云われたかのシジスモンド・パンドルフォ・マラスティですら、リミニ領主としては、多数の文献学者を身边に擁して、そのうち二、三の者には、たとえば一つの領地というような、厚い手当を施し、他の者には士官として、すくなくとも生活の代を与えていた。それ故に、この君主を破門し、その人形を火刑に処し、これと兵火をまじえた人、すなわち教皇ピウス 2 世ですら、「シジスモンドはもろもろの歴史を知り、哲学におおいに通じていた。何事にも手をつけても、生まれながらにしてそれに適しているように見えた」と云っている。⁽³³⁾

このマラスティと対照的に、マッキャヴェッリがその「政略論」(第 2 巻

24 章)のなかで「往事は世評高き將軍なりしフェデリーゴ・・・・」と言及したウルビーノ公は、アンドレ・シャステルによれば、

「すでに 1475 年頃、フィレンツェ・アカデミー全盛の時代には、マルシリオ・フィチーノを助言者兼師として委嘱し、アカデミーの一種の名誉会員としてウルビーノに拠点を作り、そこでは多年にわたってフィレンツェの書店となる程度までに、「現代」芸術と新プラトン主義的人文主義が移植されていた。」⁽³⁴⁾

ウルビーノの公爵宮殿にある有名な書斎の壁には、彼が尊崇する古今の偉人 28 人の肖像が描かれていた。だが、現在同書斎に残っているのは 14 点のみで、あとの半分はルーヴル博物館に展示されている。この書斎でひとり瞑想に耽るウルビーノ公の脳裏に去来した先哲とは、アリストテレス、プラトン、エウクリデス、ヒポクラテス、プトレマイオス、キケロ、セネカ、ポエティウス、そしてホメロス、ヴェルギリウス、ペトラルカ、ダンテ、さらには聖グレゴリウス教皇、聖アンブロジウス、聖トマス・アクイナス、聖アゴスティヌス、そして同時代人のピウス 2 世、シクストゥス 4 世、ベッサリオン枢機卿、ヴィットリーノ・ダ・フェルトレなどであった。フェデリコは 12 才の頃、人質として約 2 年間マントヴァのゴンザーガ家に預けられていた時期に、この人文主義教育家の「喜遊舎」⁽³⁵⁾で学び、そこで得たものが彼の人文主義的教養のバックボーンを形成した。フェデリコが如何にヴィットリーノ・ダ・フェルトレの教えを多としていたかをこの肖像画の存在は如実に物語っている。

フィレンツェの著名な書籍商で多くの人文主義者と交際があったヴェスパジアーノ・ダ・ビスティッチは、その「著名人列伝」のなかで、いかにフェデリコが、歴史、哲学、神学、政治学、倫理学などの古典に親しみ、それぞれ師について学び、識者と議論できるほどの知識をもっていたか、また、幾何、算術、建築にも造詣が深く、音楽、彫刻、絵画にも広い知識を持って愛好したこと、さらには、いかに古典から得た知識を武将としての活動に活用していたか、を縷々記述している。⁽³⁶⁾詳細を論ずることは本稿の目的ではないので、単にその事実だけを列記するにとどめる。

この時代はまた、あらゆる政治的・外交的な機会はもとより、日常的な冠婚葬祭においても⁽³⁷⁾イタリア語またはラテン語の演説が欠くことのできない

要素であり、人文主義者たちや人文主義的教養を備えた諸侯が自分の古典に関する知識や修辞学の才能を披瀝する絶好の手段でもあった。また、多くの諸侯は、かかる必要に備えて有能な人文主義者を自分の代弁者の用に供するため常に身边においていた。

教皇ピウス 2 世ですら、「もしもあの雄弁の名声と魅力がなかったならば、教皇庁最大の外交家かつ学者としてだけでは、おそらく教皇にはなれなかったであろう」と評された。⁽³⁸⁾

ヴェスパジアーノ・ダ・ピスティッチは「著名人列伝」のウルビーノ公の章で、フェデリコが、1467 年 7 月、ロマーニャ地方においてバルトロメオ・コッレオーニ率いる優勢なヴェネツィア軍に総攻撃をかけるに際し、自軍の将士を鼓舞する演説をおこなったと記している。⁽³⁹⁾ 戦闘の前に持ち前の雄弁で志気を鼓舞することが傭兵隊長フェデリコには欠かせない儀式であった。

ラッファエッロの父で詩人兼画家であったジョヴァンニ・サンティモウルビーノ公の生涯を歌った長編叙事詩⁽⁴⁰⁾のなかで、自軍のナポリ勢、ミラノ勢そしてウルビーノ勢それぞれに過去の武功を讃え、持てる力を発揮すれば勝利は間違いないと語りかけるフェデリコの雄弁を流麗な韻文で描写している。

しかし、フェデリコ・ダ・モンテフェルトロの人文主義的教養と文化庇護者としての功績を広く世の中に知らしめたのは、ヴェスパジアーノ・ダ・ピスティッチの協力を得て、3 万ドゥカーティの巨費を投じ 14 年以上にわたって系統的、組織的に蒐集した文庫であろう。入手が不可能な稀覯本については、普通はピスティッチの店に写本を頼んだが、それができないときは、宮廷やフィレンツェその他の町に常駐させている 30~40 人の写本家に筆写させたほどの熱の入れようであった。その蔵書は、ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語で書かれた聖書や神学、歴史、哲学、倫理、文学などの古典、同時代の人文主義者たちの著作、約 800 点⁽⁴¹⁾に上ったが、すべてが手写本で豪華に装幀されていた。この文庫は、1657 年 8 月 7 日付け教皇アレクサンデル 7 世の少勅書をもってウルビーノからヴァチカンへの移譲が決まり、同年 12 月 4 日、35 頭の口バに運ばれてヴァチカン図書館入りした。

稀覯本の蒐集をめぐる王侯間の友情について次のような逸話がある。

1478 年 6 月、教皇とフィレンツェとの戦争が勃発したとき、教皇側の連合軍総司令官であったフェデリコは、フィレンツェのヴェスパジアーノ・ダ・ピスティッチに依頼していた写本が戦火を蒙るのではないかと恐れ、心中ただご

とでなかった。とりわけ、フェデリコが心を悩ましたのは、ビスティッチ自身も“極めて貴重な”と評価していた古い聖書で、二巻本の第1巻はすでに入手済みであったが、写本を終えたばかりで、まだフィレンツェに残っている第2巻をいかに安全に入手するかであった。この話をビスティッチから聞いたロレンツォ・デ・メディチはいたく同情し、直ちにあたる限りの援助をビスティッチに与え、お陰でその聖書は無事にウルビーノに届けられた。フェデリコは敵方のロレンツォの寛容と雅量に感激して早速に礼状を書き、ロレンツォも折り返し聖書が無事ウルビーノに着いたことに同慶の意を表した。(42)

ともに人文主義的教養で知られた大口レンツォとフェデリコの一時的な敵対関係を超越した相互理解と交情のほどが窺われるエピソードではないか。

キケロはその「スキピオの夢」のなかで、“あらゆる地上の名声は、そなたが見ているあの狭隘な地域のなかに限定されている。いかなる者の高名も人々の間で永遠には続くことはなく、彼らの死によって消滅し、後代の人々の忘却のなかに死滅する”とスキピオ・アフリカーヌスに言わしめている。(43)

それにも拘わらず、このルネッサンスの時代において自分の人格と才能と実力で名誉ある地位を確立した者は、あらゆる手段を通じて自分の名と栄光を子々孫々に残したいとの欲求に駆られた。自分の周りに永遠の美や不朽の徳をペンや絵筆やノミで具象化しようとする学者や詩人や芸術家が蝟集している場合であれば尚更であったろう。ウルビーノ公フェデリコについては、シーザーの「ガッリア戦記」を範としたピエルアントニオ・パルトローニの伝記、ラッファエッロの父ジョヴァンニ、サンティの叙事詩形式の伝記、ピエロ・デラ・フランチェスカ、ユストゥス・ファン・ガン、ペドロ・ベルゲーテ等の肖像画や祭壇画、フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニの大理石レリーフ、様々な彫刻家の手になる肖像メダルなどが、ルネッサンス期イタリアを代表する傭兵隊長とうたわれた人間の実像を今日の我々にまで生き生きと伝えてくれている。

とりわけ、現在フィレンツェのウッフィーツィ美術館にあるフェデリコと妻バットιστα・スフォルツァのディッティコ(二連板絵)の肖像画とその裏の寓意画は、1474年に待望の公爵に叙任されて晴れてウルビーノ公となったフェデリコが、その喜びを共にすることなく26才の若さで死んでいった愛妻への深い哀惜の情をこめ、二人の夫婦愛の絆の強さを自分自身に再確認し、併せて人々が永遠に記憶してくれることを願ってピエロ・デラ・フランチェスカに制

作を依頼したものである。この時代の傭兵隊長のなかには、自分だけの栄光ではなく、妻を愛するという人間的な情愛までを子々孫々に伝えようとした人文主義的教養人がいたことを、この絵は如実に物語っている。

注

- (1) Alberico da Barbiano (1344 頃 ~ 1409)、ラヴェンナ地方の地主の家に生まれ、若くして英人傭兵隊長ホークウッドの部隊に加わって各地を転戦して、この間に戦術と用兵術を学んだ。独自の傭兵隊「サン・ジョルジョ軍団」を設立、教皇、ナポリ王、ミラノなどの傭兵隊長として活躍。戦術家、新たな軍制の創始者として名高く、彼の傭兵隊はその後の傭兵隊のプロトタイプとなった。
- (2) Compagnia di San Giorgio 「サン・ジョルジョ軍団」という名称をもった傭兵部隊は過去にもあって、その嚆矢は、ロドリシオ・ヴィスコンティ(Lodrisio Visconti 1280? - 1364) が 1339 年にヴェローナ領主マスティエーノ・デラ・スカーラ(Mastino della Scala) の資金で、対ミラノ公国戦のために組織した部隊だが、実体はヴィチェンツァ周辺に住み着いていたドイツ人兵士くずれを寄せ集めたものであった。聖ジョルジョの名を冠したのは、この聖人が騎士の守護聖人であったからで、設立の目的に宗教的な大義名分があったわけではない。第二の同名軍団は、1364 年、ベルナボ・ヴィスコンティ(Bernabo Visconti 1354-1385) の資金で、対トスカーナ侵攻のために息子のアンブローシオ(Ambrogio Visconti 1343-1373) が結成した。命名は大伯父ロドリシオの軍団に因んだもの。したがって、バルピアーノの傭兵部隊は第 3 次のサン・ジョルジョ軍団ということになる。設立当時の兵力は 7 千人、うち千人が騎馬隊であった。
- (3) John Hawkwood、イタリア名 Giovanni Acuto (1320 頃 ~ 1394)、14 世紀イタリアで最も活躍した英人傭兵隊長。英仏の百年戦争に参加した後、1361 年モンフェerrat 侯に雇用されてピエモンテで戦い、独自に 4 千人の騎兵隊を結成してからは、ピサ、ミラノ、教皇の順に雇い主を替えて傭兵隊長を務めた。晩年はフィレンツェ共和国の防衛に尽くし、その功績で同市郊外に土地家屋をもらい悠々自適の年金生活を送った。
- (4) のちに対立教皇クレメンズ 7 世となるロベール・ドゥ・ジュネーヴ枢機卿は、1376 年、アヴィニオン教皇グレゴリウス 11 世の意向を受け、教会領のなかにながら教会の権威に反抗する諸都市と諸侯を平定するため、ホークウッドの傭兵軍団を率いてロマーニャに進駐した。その過程で 1377 年 2 月、チェゼーナの町を謀計で占領したとき、市民 4 千人を虐殺し、略奪と婦女暴行の限りを尽くした上残りの市民をすべて国外追放に処した。イタリア中を震撼させたこの残虐行為のためクレメンズ 7 世は「チェゼーナの人殺し」と渾名されることになった。

- (5) Micheletto Attendolo (1390 頃 ~ 1448 頃)。“スフォルツァ”と渾名されたムーツィオ・アattendoloの従兄弟ないし甥で、同じコティニョーラの出身。有名なアンギアーリの戦い(1440年8月29日)でフィレンツェ勢がミラノのヴィスコンティ軍に勝てたのは、ミケレットの巧みな作戦と獅子奮迅の働きがあったためで、その結果、ミケレットの手には、遺棄された馬3千頭と多数の捕虜、そして2百を数える死体が残った、という。1448年9月のカラヴァッジョの攻防戦では、ヴェネツィア軍を率いて同族のフランチェスコ・スフォルツァ指揮するミラノ軍と戦って敗れ、結果的にスフォルツァのミラノ公への道を開く役割を担った。
- (6) Philippe Contamine, *La Guerra nel Medioevo*, Il Mulino Ed. 1986. p.228
- (7) Walter Tommasoli, *La vita di Federico da Montefeltro 1422/1482*. Argalia Ed. 1978. pp.86-7.
- (8) Michael Mallett, *I Condottieri nelle guerre d'Italia. Condottieri e uomini d'arme nell'Italia del Rinascimento*. Liguori Ed. 2001. p.352.
- (9) Jacopo dal Veme (1350 ~ 1409)。ヴェローナ出身の傭兵隊長。ジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティを助けてその叔父ベルナボーからミラノ領主の座を奪回させ、その後の版図拡大に大いに貢献した。1391年7月、フィレンツェの要請で南下したアルマニヤック伯の仏軍1万5千を撃破、さらに1401年10月には、アルベリコ・ダ・バルビアーノと共同して神聖ローマ皇帝の独軍をも敗走させた。ジャン・ガレアツォの死(1402年9月)後は相続したジョヴァンニ・マリアの柔弱と宮廷内の派閥抗争の激化に嫌気がさし、1408年ミラノを捨ててヴェネツィアに移り、翌年同地で没した。
- (10) Facino Cane (1360 頃 ~ 1412)。ジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティの傭兵隊長として版図の拡大に大いに貢献。ジャン・ガレアツォの死後の混乱を利用して自分の領地を拡大、ギベリン党の首領として勢力を伸ばし、ガレアツォの後を継いだジョヴァンニ・マリア・ヴィスコンティを1409年ミラノから追放してロンバルディア地方の実権をにぎるが1412年5月病没。遺言により妻のベアトリーチェ・ラスカーリス・ディ・テンダがすべての遺産を相続した。同年、ジョヴァンニの弟フィリッポ・マリアはそのベアトリーチェと結婚、持参金40万フィオリニのほかカーネの旧領地とその強力な傭兵軍団を手中に収めたことによりミラノ領主の地位を確固たるものにすることができた。しかし、次第にそのような妻を負担に思うようになったフィリッポ・マリアは1418年ついに姦通を理由にベアトリーチェを死刑にする。ヴィンチェンツォ・ペッリーニのオペラ「ベアトリーチェ・ディ・テンダ」はこの悲劇を題材としたもの。
- (11) Braccio da Montone (1368 ~ 1424)。本名 Andrea Fortebracci。ペルージャ貴族の子としてモンターネで生まれたことからこの通称でよばれた。教皇軍を率いてナポリ王を屈服させ、褒賞としてポローニャの支配権を得るが、1416年ペルージャを占領して宿願の領

主となる。三教皇の鼎立とナポリ王位をめぐるアラゴン家とアンジュー家の争いの状況を利用して混迷する教皇領を蚕食しようとの野望を抱くもスフォルツァ等の抵抗にあって挫折。迅速果敢な戦法で勇将の名を恣にし、ムーツィオ・アッテンドロ・スフォルツァと並んでその時代を代表する傭兵隊長の双璧と目された。彼に学んだ将兵の系列はブラッチェスキ (I bracceschi)、スフォルツァを師と仰ぐ者はスフォルツェスキ (Gli sforzeschi) とよばれ、あたかも兵学の二大流派のごとき様相を呈した。

- (12) Muzio Attendolo Sforza (1369~1424)。ロマーニャ地方コティニョーラの富裕地主の家に生まれ、若くして傭兵隊に身を投じた。“スフォルツァ”は、何事にも、“強情を張って横車を押す”(動詞はスフォルツァーレ)ムーツィオを揶揄ってアルベリコ・ダ・バルピアーノがつけた渾名だったが、ムーツィオの死後、ナポリ女王ジョヴァンナ 2 世の意向で、息子フランチェスコから代々これを姓とすることになった。1412 年以後、ナポリ王国に仕えたが、終始アラゴン家とアンジュー家の王位争いに巻き込まれ翻弄された。1424 年プラッチョ・ダ・モンターネと決戦すべくアブルツツォに向かう途次、ペスカーラ川を渡河中溺死した。無類の戦上手であったが、政治的センスには欠ける傭兵隊長であった。
- (13) Guido Riccio da Fogliano (1290 頃~1352)。レツジョ・エミリアの教皇党領袖を務める貴族の家に生まれ、中部イタリアの教皇党諸都市と連携して皇帝派に対抗する争いに一家をあげて参加。1328 年、優勢な皇帝党軍がピサを席卷してシエナ領に殺到したとき、同市の要請でシエナ軍の総帥となったグイド・リッチョは、見事に敵軍を撃退して市の期待に応えた。
- (14) Niccolò da Tolentino (1350 頃~1435)。本名はニココロ・マクルツツイ。同名の聖人と紛らわしいが出身地トレンティーノに因んで上の名前で知られている。ヴェネツィアと同盟してミラノのヴィスコンティと戦うフィレンツェに雇われ、ブレッシャの攻略 (1426 年)、マクローピオでの戦勝 (1427 年) に大きく貢献した。1431 年、フィレンツェ軍総司令官となり、翌年には宿敵シエナをサン・ロマーノの戦いで撃破して、フィレンツェから高い評価と信頼を得た。しかし、1434 年、ニココロ・ピッチニーノのミラノ軍に敗れて捕虜となり、身代金と引き換えに釈放を求めるフィレンツェの努力も功を奏さず、翌年、ミラノからバルディ牢獄への移送の途中死亡。
- (15) Bartolomeo Colleoni (1400 年頃~1475 年)。ベルガモ地方の少豪族の家に生まれたが、両親が教皇党と皇帝党の争いに巻き込まれて死亡、4 才で孤児、16 才でカルマニョーラ軍に投じて傭兵業に入る。イタリア第一等の傭兵隊長とうたわれたコッレオーニは、1454 年 4 月、ミラノ公フランチェスコ・スフォルツァとヴェネツィアの間でローディの講和が結ばれると同時に念願のヴェネツィア軍総司令官となったが、皮肉なことにその講和とイタリア同盟成立後は最早その実力を発揮する機会はほとんどなかった。それまでのコッレオーニは、ナポリを手始めにヴェネツィア、ヴィスコンティのミラノ、アンブロジーアーナ

- (ミラノ) 共和国、ヴェネツィア、ミラノ公スフォルツァと、いわばミラノとヴェネツィアの間を往復しながら、その都度めざましい武功をたてたものの、その役割は常に補佐役であった。晩年はベルガモに近い所領に住んで、修道院や教会の建立などメセナ事業に専念、ヴェネツィアには定期的に傭兵契約更新の式典に出席するだけの優雅な生活を送った。
- (16) Il Gattamelata (1370 年頃～1443 年) 本名 Erasmo da Narmi。字句通りの意味は、蜜のように甘く温和なメス猫。表面的には温和な言動をするが本性は抜け目のない策士であったエラスモをこのように渾名した、との説と、母の名、Melania Gatteli が訛ってそうだったとする説がある。ナルニのパン屋の息子として生まれたが、大柄で頑強な身体を見込まれてアッシジ領主の配下となり青年時代を過ごす。30 才のときブラッチョ・ダ・モントーネの傭兵隊に加わり 1424 年に隊長が死ぬまで行動を共にした。その後教皇国に雇われて領内の反抗分子の掃討に当たっていたが、1434 年ヴェネツィアの傭兵隊長となり、力に頼るより知恵を使って生涯同国の防衛に尽くした。政治的野望をもたず雇用主にひたすら誠実であることがこの傭兵隊長の最大の長所であった。
- (17) Il Carmagnola (1380 年頃～1432 年) 本名 Francesco Bussone。生国の地名をとってイル・カルマニョーラ、あるいは、カルマニョーラ伯と通称された。出自は不明だが、農民の子に生まれ、傭兵になる前は牛飼いをしていたとも云われている。主人の傭兵隊長ファチーノ・カーネの死後は未亡人ベアトリーチェに従い、彼女がフィリッポ・マリア・ヴィスコンティと再婚後は、ヴィスコンティ公政権の再建に大きな役割を果たした。名声が上がるにつれて同輩の嫉みを買ひ、公からも不信をもたれたため 1425 年ヴェネツィアに鞍替え。ヴェネツィア・フィレンツェ連合軍を指揮してヴィスコンティ軍と戦い、1427 年マクローディオの戦いでミラノ軍に大勝した。しかしこの戦勝後は、ヴェネツィア政府の強い要請にも拘わらず、消極的な戦いぶりに終始したため、ミラノとの内通を疑われて 1432 年 4 月逮捕され、反逆の罪により死刑の判決を受ける。5 月 5 日斬首。マンゾーニは、カルマニョーラ無罪説にたって悲劇「カルマニョーラ伯」(1820 年) を書いた。
- (18) Niccolo Piccinino (1386 年頃～1444 年)。肉屋の子としてペルージャに生まれ、出世を目指して傭兵となる。小柄な男だったためピッチーノ(ちび)と渾名され、それが訛ってピッチニーノと呼ばれるようになった。ブラッチョ・ダ・モントーネの傭兵隊に入隊、めきめきと頭角を現してブラッチョの信任を獲得、その姪を妻とする。ブラッチョの死後、その軍団を率いてフィリッポ・マリア・ヴィスコンティに仕え、ミラノの勢拡大に大いに貢献した。1438 年から 40 年にかけては向かうところ敵なしの威勢で、フランチェスコ・スフォルツァと並び称される傭兵隊長となった。しかし、ライバルのスフォルツァとの対戦では分が悪く、とりわけフィリッポ・マリアがピッチニーノの勢威をおそれ、これを牽制するためスフォルツァを娘婿としてからは、事ごとに雇用主の掣肘を受けるようになり、失意のうちに病死した。

- (19) Franco Cardini, *Condottieri e uomini d'arme nell'Italia del Rinascimento*, GISEM Liquori Ed. 2001. p.3.
- (20) Marinella Bonvini Mazzanti, Giovanni Della Rovere, *Un "principe nuovo" nelle vicende italiane degli ultimi decenni del XV secolo*. Ed. 2G Senigallia. 1983. pp.71-2.
- (21) Mario Del Treppo, *Sulla struttura della compagnia o condotta militare*. GISEM Liquori Ed. 2001. pp.419-420.
- (22) Marinella Bonvini Mazzanti, *Il Duca Federico e gli architetti, "Atti del Convegno Contributi e ricerche su Francesco di Giorgio Martini nell'Italia Centrale"*, Urbino. 2003.
- (23) Walter Tommasoli, *La vita di Federico da Montefeltro 1422/1482*. Argalia Editore Urbino. 1978. p.188.
- (24) *ibid.*, pp.289-290.
- (25) *ibid.*, p.59.
- (26) *ibid.*, pp.253-4.
- (27) Frederic C. Lane, *Storia di Venezia*. Einaudi. 1978. p.274, p.280.
- (28) Walter Tommasoli, *op.cit.*, p.101.
- (29) *ibid.*, pp.64-5.
- (30) 1444年、ペーザロ領主ガレアツォ・マラスティは、同族のリミニ領主シジモンド・パンドルフォ・マラスティがかねてからペーザロ併合の野心をもっていることを恐れ、その文人的性格もあって、所領を売却して隠遁する決心をし、妻の甥に当たるフェデリコ・ダ・モンテフェルトロに斡旋を依頼した。フェデリコは、自国にとって戦略的に重要な価値をもつフォッソブローネだけでもなんとかして取得したいと思い、それを除いた土地、つまりペーザロとその周辺地域の買い手を物色した結果、フランチェスコ・スフォルツァの弟アレックスandroをガレアツォの姪コスタンツァ・ヴァラーノ（フェデリコの従姉妹でもあった）と結婚させてペーザロ領主にするという条件でフランチェスコに購入を引き受けさせた。（2万ドゥカーティ）売買契約は1445年1月に締結、それによってフェデリコもフォッソブローネを1万3千ドゥカーティ、年賦払いで購入することになった。これらの土地は理論的には教皇領である。従って、それを勝手に売買の対象にするのは不当であり、当然ながら教皇を激怒させたが、万事に実力がものをいうこの時代、結局はうやむやのうちに現状が追認されて終わった。
- (31) Walter Tommasoli, *op.cit.*, pp.341-4.
- (32) ブルクハルト / 柴田治三郎訳 『イタリア・ルネッサンスの文化』 中央公論新社、2002年、351頁。
- (33) 同前、359～360頁。

- (34) アンドレ・シャステル / 桂芳樹訳 『ルネッサンス精神の深層』、筑摩学芸文庫、55 頁。
- (35) 1423 年、ヴィットリーノ・ダ・フェルトレ（1378 年頃～1446 年）は、マントヴァ侯ジャンフランチェスコ・ゴンザーガの招聘でマントヴァに移住、当初はゴンザーガ家の子弟教育を目的としてこの学校（Ca' Zoiosa = Casa Gioiosa）を設立した。それは、全的な人格形成のためにキリスト教精神と人文主義理念の融合を図ろうとする最初の学校であった。また知育と体育をバランスよく配分した授業がおこなわれたのもここが始まりであった。こうした教育内容の斬新さからその名声が高まるにつれ、国内外の貴顕富豪からも入学希望が寄せられるようになり、また、フェルトレ自身の教育理念にもとづき、貧乏人の子弟であっても才能のあるものには門戸を開いたため、ここには常時 70 名程度の生徒が勉強していた。
- (36) Vespasiano da Bisticci, *Le Vite*. Edizione critica con introduzione e commento di Aulo Greco. Istituto Nazionale di Studi sul Rinascimento Firenze. 1970. Vol. I. pp.379-85.
- (37) 1475 年 6 月 25 日、リミニ領主ロベルト・マラステティとウルビーノ公フェデリコの娘エリザベッタの婚儀がリミニで執り行われ、その前日から 1 週間にわたって数々の祝賀の行事が催された。その際の来賓、贈り物、宴会献立のほか、演説者、楽師、道化師、歌手、舞踊家、舞台装置技師、料理人などへの報酬を記録した史料が、ペーザ口のオリヴェリアーナ図書館にある。これによれば、この婚礼にも二人の演説者が祝辞を述べている。その一人マリオ・フィレルフォには 25 ドゥカーティと 5 ドゥカーティ 18 ボロニーニ相当の布地が支払われ、もう一人の即興演説を行った者、フィレンツェ人のアントニオ某にも 25 ドゥカーティが支払われている。マリオ・フィレルフォはかの有名な人文主義者フランチェスコ・フィレルフォの息子ジャン・マリオかも知れない。なお、ウルビーノ公はこの娘の持参金として 1 万 2 千ドゥカーティをロベルト・マラステティに贈っている。
- (38) ブルクハルト 『前掲書』、371 頁。
- (39) Vespasiano da Bisticci, *op.cit.*, p. 365.
- (40) Giovanni Santi, *La vita e le gesta di Federico di Montefeltro Duca d'Urbino*. Poema in terza rima a cura di Luigi Michelini Tocchi Biblioteca Apostolica Vaticana. 1985.
- (41) この文庫の蔵書数については記録によってばらつきがある。ヴァチカンへの移送の前に、ヴァチカン側の担当者モンシニョーレ、ハーカ・ホルステニオが試算した評価額のリストなるものがあり、そこに古い文庫として分類された蔵書の点数は次の通りである。
- | | |
|------------------|-------|
| ヘブライ語及びアラビア語の手写本 | 58 点 |
| ギリシャ語手写本 | 148 点 |
| ラテン語古典の手写本 | 371 点 |

ラテン語同時代著作の手写本 326 点

イタリア語同時代著作の手写本 61 点 計 964 点

なお、古い文庫とは、フェデリコの文庫に加えて歴代のウルビーノ公が蒐集したものを含むとされている。

(42) Walter Tommasoli, *op.cit.*, pp.293-4.

(43) Marcus Tullius Cicero, *De republica. Somnium Scipionis*, VI.